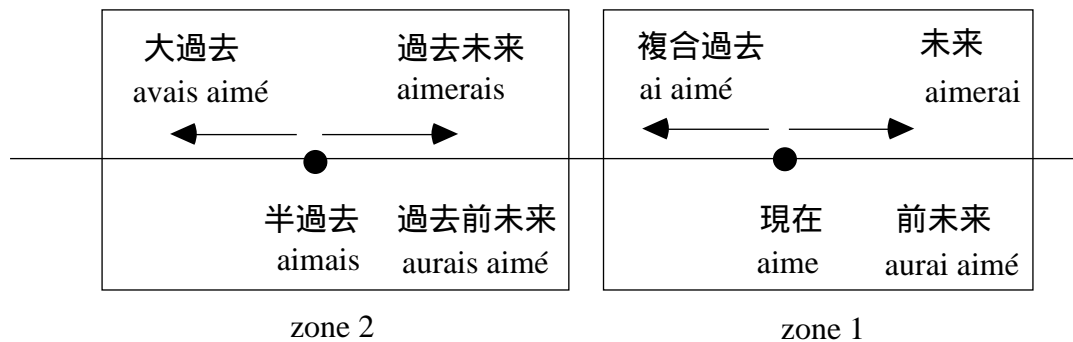


今回の話題は条件法である。「法」la mode というものが動詞に直接刻まれていない日本語を話している私たちには、法のイメージを捉えることはむずかしい。文法の時間にちょこっと習ってもなかなかうまく使えるようにならない。これはなぜなのだろうか。それは法というものの性質自体に原因があるのである。

### 再びふたつのゾーン

フランス語の時制体系をまとめる図式として、下のような図を8月号で初めてご披露した。「ふたつのゾーン」理論である。



この図を見たとき読者諸賢は、すでに条件法の説明を視野に入れた布石が打ってあったことにお気づきだったかもしれない。そうなのである。zone 1は「現在」を中心とする時制グループで、話し手は「今・現在」に視点を置いて出来事を眺める。一方 zone 2は「半過去」を中核とする時制グループで、話し手はこの図の外から与えられた過去のある時点 t-1 に視点を置いて出来事を眺める。このような説明だった。この説明のキモは、zone 2では話し手の視点が「過去に飛ぶ」という点である。

zone 2の時制はそっくりそのまま条件法に現われる。図の「過去未来」を「条件法現在」に、「過去前未来」を「条件法過去」に書き換えればよい。

(1) Si j'étais à ta place, je serais furieux

「もし私が君だったら、怒っているところです」

(2) Si j'avais été à ta place, j'aurais été furieux.

「もし私が君だったら、怒っていたところです」

条件法は現実を裏返しにして表現する法であり、「男である私がもし女に生まれていたならば」とか「もしあの時君に会っていなかったら」などという仮定の世界を表わすものである。だからこれはSFというパラレルワールドと同じと考えてよい。

ではなぜ本来は過去の世界を表わす zone 2が、パラレルワールドを表現するときにも使われるのだろうか。その鍵は zone 1 と zone 2 のあいだの「断絶」にある。11

月号で *Je m'y attendais*. 「こうなると思っていたよ」型の半過去を説明するとき、  
「zone 2 は zone 1 と断絶した別の世界を表わす」と述べたことを思い出していただき  
たい。zone 2 は単なる「過去の世界」ではない。もしそうならば時間軸の上で過去  
と現在とは連続していてもよいはずである。zone 2 は「現在とは異なる別の認識」  
が成り立つ世界であり、この意味で現在と断絶しているのである。

「断絶」が「現在」に対して作用すると zone 2 は過去時制として働くが、「断絶」  
が「現実」に対して作用すると zone 2 はパラレルワールドを表わす時制(法)として  
働くことになる。おおむねこのように説明できるだろう。このとき話し手の視点は  
過去に飛ぶのではなく、ありえたかもしれない世界であるパラレルワールドに飛ぶ  
のである。このように条件法は、「別の世界に身を置く」という認識の変更を伴う  
ためにマスターすることがむずかしいのである。

### 隠れ条件法

条件法は文法クラスではよく *si + 半過去 条件法現在* , *si + 大過去 条件  
法過去* という図式で教えられている。これは便利な図式ではあるが落とし穴があ  
る。条件法はこれ以外の形で出て来ることも多く、それが見過ごされてしまうから  
である。次は主語名詞句が条件節の代わりにしている例である。

(2) *Un Japonais dirait «Oui»*. 「日本人ならはいと言うところですね」

(3) *Un guide officiel aurait gâché mon voyage*.

「ガイドブックを見ていたら、私の旅行は台無しになっていただろう」

(2) はフランス人が «Non.» と行って拒絶した後でのセリフで、*un Japonais* は *si c'était  
un Japonais* と同じである。(3) はガイドブックを無視したためにかえって楽しい旅行  
ができた人のセリフで同じタイプである。

(4) *Ne cours pas après un type comme lui. Tu plairais à des milliers d'autres*.

「あんな男を追いかけるのは止めなよ。あなたなら誰にでもモテるのに」

(5) *Mais quelqu'un qui saurait me prendre avec plus d'autorité, oui, peut-être*.

「でも私をもっと強引に引っ張ってくれる人だったらたぶん大丈夫ね」

(4) はかなわぬ恋だからと友人の女性に忠告しているセリフ。*tu plairais* の条件法に  
「あんな男」しか眼中にない友人に対する苛立ちが感じられる。(5) では関係節の中  
で条件法が使われているので、関係節の内容だけでなく先行詞の *quelqu'un* もまた  
非現実世界の住人となる。「もしこんな人がいたら」という期待の気持ちは条件法  
が作り出したものである。

### 不可能性を強める条件法

条件法が現実とは断絶した世界を表わすところから、不可能性を強める用法が出て来る。よく文法書では *Je voudrais voir M. Perrin.* 「ペランさんにお会いしたいのですが」のような例を挙げ、「婉曲用法」とか「語気緩和」などと説明されることが多いので、条件法ならば何でも語調を和らげていねいになるのだと勘違いする人がいるが、これは大きなまちがいである。

たとえば冬にプールに飛び込むように言われた時、*Je n'ose pas.* と直説法で答えると「やめときます」程度の拒絶だが、*Je n'oserais pas.* と条件法で答えたら「とてもそんなことできません」という強い否定になる。また意外なことを言われたとき、*Ça m'étonne.* は「え、ホント?」程度の軽い答えだが、*Ça m'étonnerait.* は「まさかそんなこと」という強い驚きを表わす。ここでも条件法は、zone 1 の現実とは断絶した zone 2 の世界に属するところから、現実の裏返しとしての不可能という意味が生じるのである。条件法はいつも「裏返し」の世界であることを忘れてはいけない。これを意識するためによいことを思いついた。p. 00 の図のふたつの四角の真ん中に縦の線を書き、その線を中心にして左右を折り畳む。すると zone 1 の裏側に zone 2 が重なるはずである。こうすれば zone 2 の時制は zone 1 の時制の裏返しになることが体験的にわかると思うのだがいかがだろう。

では婉曲用法と言われている *Je voudrais voir M. Perrin.* のような例はどのように考えればよいのだろうか。実は半過去にも婉曲なていねい語法があるのだ。

(6) *Je venais vous demander quelque chose.*

「ちょっとおたずねしたいことがあってお邪魔したのですが」

これがていねいになるのは半過去が未完了を表わすからだと言われることがあるがそれはちがう。これは半過去も条件法も zone 2 に属しているという事実から説明できる。zone 2 は現実世界である zone 1 とは断絶した別の世界である。zone 2 は *Ça m'étonnerait.* のように話し手自身の判断を表わすときには、「別の世界」「ありえないこと」という道筋で不可能性という意味になる。ところが例 (6) のように聞き手に対する働きかけという文脈で自分の要求を zone 2 に置くということは、「もしあなたの同意があれば」という仮の世界に置くことになり、結果的にていねいな言い方になるのである。このように半過去と条件法が同じ婉曲効果を持つことは、両者が同じ zone 2 に属すると考えることで初めて説明がつくのである。

### 責任回避の条件法

最後に発言の責任を他人になすりつける条件法の使い方がある。

(7) *Certains pensent que la vérité scientifique est hors des atteintes de doute. Les phénomènes de la nature obéiraient à des lois établies une fois pour toutes.*

「科学上の真理は疑いを入れる余地がないと考える人がいる。(その人たちによ

れば)自然現象はきちりと定められた法則に従うというわけだ」

前半は書き手の立場からの主張だが、条件法を含む後半はそうではない。「科学は絶対だと考える人」の視点に仮に身を置いて述べてみたものだ。書き手は必ずしも科学は万能ではないと考えているので、書き手自身の考えとは逆の内容になっている。条件法は「裏返しの世界」であることを思いだそう。これを直説法のように「自然現象はきちりと定められた法則に従う」と訳したら、書き手自身がそう考えていると受け取られてしまう。条件法は「視点」と「世界」を入れ替える法である。zone 1 が話し手が現実・真実だと見なしている世界だとすれば、zone 2 はその裏返しの世界である。だから zone 2 に属する条件法を用いた発言には、話し手は十全な責任を負うことがない。ここから派生するのが *Le président aurait démissionné*. 「大統領が辞職したらしい」のような伝聞用法であり、例(7)の責任回避用法はその延長線上に成り立つものである。

フランス語を話すとき、ほんとうにこんな風にコロコロと「視点」や「世界」をスイッチしているのだろうか？ そうなのである。このことがコトバの習得でいちばんむずかしい点なのかもしれない。

(とうごう・ゆうじ)